

G 集合の制限と誘導について

才

2023 年 7 月 28 日

概要

G を有限群, H を G の部分群とする. G 集合と H 集合の間の制限と誘導について紹介し, それらが関手として随伴の関係にあることを述べた. また, 随伴関手の基本的な事実を, 応用するものに限って簡単に解説した.

1 制限と誘導の定義

G を有限群, H を G の部分群とする. Y を有限左 G 集合とし, その作用は $\rho: G \rightarrow \text{Aut } Y$ で与えられているとする. このとき, 任意の $g \in G, y \in Y$ に対して, 誤解の恐れがない限り

$$\rho(g)(y) = g \cdot y = gy$$

と書くことがある. また, X は作用が σ である有限左 H 集合だとする. 以下, 特に断らない限り, 作用は左作用のみを考え, 単に G 集合と言ったときには, 特に有限なものを指すことにする¹⁾.

G 集合は自然な方法で H 集合と見なせる. つまり, H の Y への作用を $\rho|_H$ で定めることで, Y は H 集合となる. このようにして定まる H 集合 Y を

$$\text{Res}_H^G Y \quad \text{や} \quad Y \downarrow_H^G$$

で表し, Y の G から H への**制限 (restriction)**と呼ぶことにする. また, 任意の G 写像 $f: Y \rightarrow Y'$ は H 写像 $f: Y \downarrow_H^G \rightarrow Y' \downarrow_H^G$ でもある. この f が H 写像であることを強調するときには $f \downarrow_H^G$ と書く.

逆に, H 集合を G 集合に自然に見なす方法を考える. まず, 簡単な場合として, $K \leq H$ に対し, H/K を G 集合に見なすことを考える. この場合, 任意の $g \in G, hK \in H/K$ に対して, 作用を自然に

$$g \cdot hK := ghK$$

1) 以下の議論は, 無限群 G や無限位数の G 集合を含めて考えてもよいと思うが, ここでは慣れ親しんだ有限の場合に限定しておく.

と定めることができるが、このとき、 H/K は明らかに推移的 G 集合である。よって、 K の固定化群を G_K とすれば、 G 集合としての同型 $H/K \cong G/G_K$ が成り立つ。また、

$$\begin{aligned} g \in G_K &\iff g.K = K \\ &\iff g \in K \end{aligned}$$

ゆえ、結局 $H/K \cong G/K$ である。

以上の簡単な場合を踏まえて、一般の H 集合を G 集合に見なす方法を述べる。直積 $G \times X$ に対して、 H の右からの作用

$$(a, x).h := (ah, h^{-1}.x) \quad ((a, x) \in G \times X, h \in H)$$

を考える。このときの $G \times X$ の軌道全体の集合を $G \times_H X$ と書き、 (a, x) の軌道を $(a, x)H$ と書く。先ほどの場合において、 $ah.h^{-1}K = a.K$ が成り立っていたことを踏まえると、このような集合を考えることが自然に思えるかもしれない。さて、 $G \times_H X$ への G の作用を定めるために、次の補題を準備する。

補題 1.1 任意の $(a_1, x_1)H = (a_2, x_2)H \in G \times_H X$ と $g \in G$ に対して、 $(ga_1, x_1)H = (ga_2, x_2)H$ が成り立つ。 □

証明 ある $h \in H$ が存在して、 $(a_1, x_1) = (a_2h, h^{-1}.x_2)$ が成り立つ。このとき、

$$\begin{aligned} (ga_1, x_1) &= (ga_2h, h^{-1}.x_2) \\ &= (ga_2, x_2).h \end{aligned}$$

だから、 $(ga_1, x_1)H = (ga_2, x_2)H$ である。 ■

補題より、 G の $G \times_H X$ への作用を

$$g.(a, x)H := (ga, x)H$$

で定めることができる。この作用によって得られた G 集合 $G \times_H X$ を

$$\text{Ind}_H^G X \quad \text{や} \quad X \uparrow_H^G$$

で表し、 X の H から G への誘導 (induction) と呼ぶ。

誘導の簡単な例を一つ挙げる。

命題 1.2 任意の $K \leq H$ に対して、 $\text{Ind}_H^G H/K \cong G/K$ である。 □

証明 任意の $(a, hK) \in G \times H/K$ に対して,

$$(a, hK) = (ah, K).h^{-1}$$

が成り立つから, $G \times_H H/K$ の任意の元は $(a, K)H$ ($a \in G$) で表せる. さらに, 任意の $(a, K)H \in \text{Ind}_H^G H/K$ に対して

$$(a, K)H = a.(e_G, K)H \quad (e_G \text{ は } G \text{ の単位元})$$

だから, $\text{Ind}_H^G H/K$ は推移的である. また, 任意の $g \in G$ に対して

$$\begin{aligned} g.(e_G, K)H = (e_G, K)H &\iff \text{ある } h \in H \text{ が存在して } (g, K).h = (e_G, K) \\ &\iff \text{ある } h \in H \text{ が存在して } gh = e_G, h^{-1}K = K \\ &\iff g \in H \text{ かつ } g^{-1} \in K \\ &\iff g \in H \cap K \end{aligned}$$

なので, $(e_G, K)H$ の固定化群は $H \cap K = K$ である. したがって, $\text{Ind}_H^G H/K \cong G/K$ である. ■

また, G 写像から制限の間の H 写像が定まったときと同じように, H 写像 $f: X \rightarrow X'$ から, 誘導の間の写像 $\text{Ind}_H^G X \rightarrow \text{Ind}_H^G X'$ が定まる.

補題 1.3 任意の H 写像 $f: X \rightarrow X'$ と $(a_1, x_1)H = (a_2, x_2)H \in \text{Ind}_H^G X$ に対して, $(a_1, f(x_1))H = (a_2, f(x_2))H$ が成り立つ. □

証明 ある $h \in H$ が存在して, $(a_1, x_1) = (a_2h, h^{-1}.x_2)$ が成り立つ. このとき,

$$\begin{aligned} (a_1, f(x_1)) &= (a_2h, f(h^{-1}x_2)) \\ &= (a_2h, h^{-1}f(x_2)) \\ &= (a_2, f(x_2)).h \end{aligned}$$

だから, $(a_1, f(x_1))H = (a_2, f(x_2))H$ である. ■

補題 1.4 $f: X \rightarrow X'$ を H 写像とする. 補題 1.3 より定まる写像

$$\text{Ind}_H^G f: \text{Ind}_H^G X \rightarrow \text{Ind}_H^G X': (a, x)H \mapsto (a, f(x))H$$

は G 写像である. □

証明 任意の $g \in G$, $(a, x)H \in \text{Ind}_H^G X$ に対して

$$\begin{aligned}\text{Ind}_H^G f(g.(a, x)H) &= (ga, f(x))H \\ &= g.(a, f(x))H \\ &= g.\text{Ind}_H^G f((a, x)H)\end{aligned}$$

が成り立つから, $\text{Ind}_H^G f$ は G 写像である. ■

ここまでで与えた制限と誘導の構成は, 実は関手的である. $G\text{-set}$ で G 集合の圏を表すことにすれば²⁾, 次の命題が成り立つ.

命題 1.5 以下がそれぞれ成り立つ.

(1)制限を与える対応 Res_H^G は set^G から set^H への関手である.

(2)誘導を与える対応 Ind_H^G は set^H から set^G への関手である. □

証明 写像の合成と恒等写像を保つことを確認すればいいが, これは構成の仕方から明らかである. ■

ここでは, Res_H^G を制限関手, Ind_H^G を誘導関手と呼ぶことにする.

2 随伴関手

誘導関手と制限関手の間には, ある意味で良い対応が存在する. より具体的には, 誘導関手は制限関手の左随伴となる. このことを説明するために, 随伴関手の基本的な概念について簡単に紹介する.

定義 2.1 $F: \mathcal{C} \rightarrow \mathcal{D}$, $G: \mathcal{D} \rightarrow \mathcal{C}$ を関手とする. $C \in \mathcal{C}$, $D \in \mathcal{D}$ に関して自然な全単射

$$\varphi = \varphi_{C,D}: \text{Hom}_{\mathcal{D}}(FC, D) \cong \text{Hom}_{\mathcal{C}}(C, GD)$$

が存在するとき, F は G の**左随伴** (left adjoint), または, G は F の**右随伴** (right adjoint) であると言い, $F \dashv G: \mathcal{C} \rightarrow \mathcal{D}$ と表す. □

φ の添え字は適宜省略する. ここで, $C \in \mathcal{C}$, $D \in \mathcal{D}$ に関して自然とは, 任意の

2) set^G と表すこともある. こう書いたときには, G 集合を関手 $G \rightarrow \text{set}$, G 写像を自然変換に見なせることを強調していると思う. 一般に, 圏 \mathcal{C} から圏 \mathcal{D} への関手全体の成す圏を $\mathcal{D}^{\mathcal{C}}$ と表す.

$f \in \text{Hom}_{\mathcal{C}}(C, C')$, $g \in \text{Hom}_{\mathcal{D}}(D, D')$ に対して, 図式

$$\begin{array}{ccc} \text{Hom}_{\mathcal{D}}(FC, D) & \xrightarrow{\varphi_{C,D}} & \text{Hom}_{\mathcal{C}}(C, GD) \\ (Ff)^* \uparrow & & \uparrow f^* \\ \text{Hom}_{\mathcal{D}}(FC', D) & \xrightarrow{\varphi_{C',D}} & \text{Hom}_{\mathcal{C}}(C', GD) \end{array}, \quad \begin{array}{ccc} \text{Hom}_{\mathcal{D}}(FC, D) & \xrightarrow{\varphi_{C,D}} & \text{Hom}_{\mathcal{C}}(C, GD) \\ g_* \downarrow & & \downarrow (Gg)_* \\ \text{Hom}_{\mathcal{D}}(FC, D') & \xrightarrow{\varphi_{C,D'}} & \text{Hom}_{\mathcal{C}}(C, GD') \end{array}$$

が可換になることを言う. ここで, $f^*: h \mapsto h \circ f$, $g_*: h \mapsto g \circ h$ である. 可換図式から, 任意の $h \in \text{Hom}_{\mathcal{D}}(FC, D)$ と $h' \in \text{Hom}_{\mathcal{D}}(FC', D)$ に対して

$$Gg \circ \varphi(h) = \varphi(g \circ h), \quad \varphi(h') \circ f = \varphi(h' \circ Ff) \quad (2.1)$$

が成り立っている.

補題 2.1 $F \dashv G: \mathcal{C} \rightarrow \mathcal{D}$ とし, $\varphi: \text{Hom}_{\mathcal{D}}(FC, D) \cong \text{Hom}_{\mathcal{C}}(C, GD)$ とする.

(1) 任意の $C \in \mathcal{C}$ に対して

$$\eta_C := \varphi(1_{FC})$$

とおく. このとき, $\eta := \{\eta_C\}_C$ は恒等関手 $1_{\mathcal{C}}$ から GF への自然変換である.

(2) 任意の $D \in \mathcal{D}$ に対して

$$\varepsilon_D := \varphi^{-1}(1_{GD})$$

とおく. このとき, $\varepsilon := \{\varepsilon_D\}_D$ は FG から $1_{\mathcal{D}}$ への自然変換である. □

証明 (2) は (1) の双対命題なので, (1) を示せば十分である.

任意の $f \in \text{Hom}_{\mathcal{C}}(C, C')$ に対して, 図式

$$\begin{array}{ccc} C & \xrightarrow{\eta_C} & GFC \\ f \downarrow & & \downarrow GFf \\ C' & \xrightarrow{\eta_{C'}} & GFC \end{array}$$

の可換性を示せばよい. これは,

$$\begin{aligned} GFf \circ \eta_C &= GFf \circ \varphi(1_{FC}) \\ &= \varphi(Ff) \\ &= \varphi(1_{FC'}) \circ f \\ &= \eta_{C'} \circ f \end{aligned}$$

から分かる. ■

定義 2.2 補題 2.1 で定まる自然変換 η, ε を, それぞれ随伴 $F \dashv G$ の **単位 (unit)**, **余単位 (counit)** と呼ぶ. □

式 (2.1) より, 任意の $g \in \text{Hom}_{\mathcal{D}}(FC, D)$ に対して

$$\varphi(g) = Gg \circ \eta_C,$$

が成り立つ. また, 双対性より, 任意の $f \in \text{Hom}_{\mathcal{C}}(C, GD)$ に対しては

$$\varphi^{-1}(f) = \varepsilon_D \circ Ff$$

が成り立つ. したがって, 随伴を与える自然な全単射 φ は, 単位と余単位によって具体的に表示できる.

逆に, 関手の組 (F, G) に対して適切な自然変換の組 (η, ε) を定めることができれば, $F \dashv G$ が成り立つことを確認できる. このことを述べたのが次の定理である.

定理 2.2 $F: \mathcal{C} \rightarrow \mathcal{D}$, $G: \mathcal{D} \rightarrow \mathcal{C}$ を関手とする. $F \dashv G$ であるための必要十分条件は, ある自然変換 $\eta: 1_{\mathcal{C}} \rightarrow GF$, $\varepsilon: FG \rightarrow 1_{\mathcal{D}}$ が存在して,

$$\varepsilon F \cdot F\eta = 1_F, \quad G\varepsilon \cdot \eta G = 1_G \quad (2.2)$$

を満たすことである. □

証明の前に, 自然変換の垂直合成, 水平合成について述べておく.

図式

$$\begin{array}{ccc} & R & \\ \swarrow & \downarrow \sigma & \searrow \\ C & \xrightarrow{S} & D \\ \nwarrow & \downarrow \tau & \nearrow \\ & T & \end{array}$$

を考える. このとき, 新たな自然変換 $\tau \cdot \sigma: R \Rightarrow T$ が

$$(\tau \cdot \sigma)_C := \tau_C \circ \sigma_C$$

によって定まる. この自然変換 $\tau \cdot \sigma$ を σ と τ の**垂直合成** (vertical composite) と呼ぶ.

つづいて, 図式

$$B \xrightarrow{F} C \begin{array}{c} \xrightarrow{R} \\ \downarrow \sigma \\ \xrightarrow{S} \end{array} D \xrightarrow{G} E$$

を考える. このとき, 新たな自然変換 $\sigma F: RF \Rightarrow SF$, $G\sigma: GR \Rightarrow GS$ が

$$(\sigma F)_B := \sigma_{FB}, \quad (G\sigma)_C := G(\sigma_C)$$

で定まる. これらの自然変換 $\sigma F, G\sigma$ を, それぞれ F と σ , σ と G の**水平合成** (horizontal composite) と呼ぶ.

証明 $F \dashv G$ だとし, η, ε をそれぞれ単位, 余単位とする. このとき, 任意の $f \in \text{Hom}_{\mathcal{C}}(C, C')$, $g \in \text{Hom}_{\mathcal{D}}(D, D')$ に対して

$$\begin{aligned} (\varepsilon F \cdot F \eta)_C &= \varepsilon_{FC} \circ F \eta_C \\ &= \varphi^{-1}(\eta_C) \\ &= 1_{FC}, \\ ((G \varepsilon) \cdot (\eta G))_D &= G \varepsilon_D \circ \eta_{GD} \\ &= \varphi(\varepsilon_D) \\ &= 1_{GD} \end{aligned}$$

だから, 等式 (2.2) が成り立つ.

逆に, 自然変換 η, ε が等式 (2.2) を満たすとする. このとき, 任意の $C \in \mathcal{C}$, $D \in \mathcal{D}$ に対して, 写像 $\varphi_{C,D}: \text{Hom}_{\mathcal{D}}(FC, D) \rightarrow \text{Hom}_{\mathcal{C}}(C, GD)$, $\theta_{C,D}: \text{Hom}_{\mathcal{C}}(C, GD) \rightarrow \text{Hom}_{\mathcal{D}}(FC, D)$ をそれぞれ

$$\begin{aligned} \varphi_{C,D}(g) &:= Gg \circ \eta_C \quad (g \in \text{Hom}_{\mathcal{D}}(FC, D)) \\ \theta_{C,D}(f) &:= \varepsilon_D \circ Ff \quad (f \in \text{Hom}_{\mathcal{C}}(C, GD)) \end{aligned}$$

で定める. このとき, 任意の $f \in \text{Hom}_{\mathcal{C}}(C, GD)$ に対して

$$\begin{aligned} \varphi_{C,D} \circ \theta_{C,D}(f) &= G(\varepsilon_D \circ Ff) \circ \eta_C \\ &= G\varepsilon_D \circ GFf \circ \eta_C \\ &= G\varepsilon_D \circ \eta_{GD} \circ f \\ &= f, \end{aligned}$$

が成り立つ. また, 同様にして, 任意の $g \in \text{Hom}_{\mathcal{D}}(FC, D)$ に対して $\theta_{C,D} \varphi_{C,D}(g) = g$ が成り立つので, $\varphi_{C,D}$ は全単射であり, $\theta_{C,D} = \varphi_{C,D}^{-1}$ である.

後は, $\varphi = \{\varphi_{C,D}\}$ が $C \in \mathcal{C}$, $D \in \mathcal{D}$ について自然であることを確かめればよい. 任意の $g \in \text{Hom}_{\mathcal{D}}(D, D')$, $h \in \text{Hom}_{\mathcal{D}}(FC, D)$ に対して

$$(Gg)_* \circ \varphi_{C,D}(h) = Gg \circ Gh \circ \eta_C = G(gh) \circ \eta_C = \varphi_{C,D'} \circ g_*(h)$$

が成り立つから, φ は D について自然である. C について自然であることも同様にして分かる.

以上より, φ が随伴 $F \dashv G$ を与えていて, 単位, 余単位はそれぞれ η, ε である. ■

3 制限関手と誘導関手の随伴性

最後に, 誘導関手が制限関手の左随伴であることを確かめる.

定理 3.1 任意の有限群 G と部分群 $H \leq G$ に対して, $\text{Ind}_H^G \dashv \text{Res}_H^G$ である. □

証明 H 集合 X , G 集合 Y に対して, 写像 $\eta_X: X \rightarrow \text{Res}_H^G \text{Ind}_H^G X$, $\varepsilon_Y: \text{Ind}_H^G \text{Res}_H^G Y \rightarrow Y$ を

$$\begin{aligned}\eta_X(x) &:= (e_G, x)H \quad (x \in X), \\ \varepsilon_Y((g, y)H) &:= g \cdot y \quad ((g, y)H \in \text{Ind}_H^G \text{Res}_H^G Y)\end{aligned}$$

で定めると, 自然変換 $\eta: 1_{H\text{-set}} \Rightarrow \text{Res}_H^G \text{Ind}_H^G$, $\varepsilon: \text{Ind}_H^G \text{Res}_H^G \Rightarrow 1_{G\text{-set}}$ が得られる. これらが等式 (2.2) を満たすことを確認すればよい.

任意の H 集合 X と $(g, x)H \in \text{Ind}_H^G X$ に対して,

$$\begin{aligned}(\varepsilon \text{Ind}_H^G \cdot \text{Ind}_H^G \eta)_X((g, x)H) &= \varepsilon_{\text{Ind}_H^G X} \circ \text{Ind}_H^G \eta_X((g, x)H) \\ &= \varepsilon_{\text{Ind}_H^G X}((g, (e_G, x)H)H) \\ &= g \cdot (e_G, x)H \\ &= (g, x)H\end{aligned}$$

なので, $\varepsilon \text{Ind}_H^G \cdot \text{Ind}_H^G \eta = 1_{\text{Ind}_H^G X}$ である. また, 任意の G 集合 Y と $y \in \text{Res}_H^G Y$ に対して,

$$\begin{aligned}(\text{Res}_H^G \varepsilon \cdot \eta \text{Res}_H^G)_Y(y) &= \text{Res}_H^G \varepsilon_Y \circ \eta_{\text{Res}_H^G Y}(y) \\ &= \text{Res}_H^G \varepsilon_Y((e_G, y)H) \\ &= e_G \cdot y \\ &= y\end{aligned}$$

なので, $\text{Res}_H^G \varepsilon \cdot \eta \text{Res}_H^G = 1_{\text{Res}_H^G Y}$ である.

したがって, 定理 2.2 より $\text{Ind}_H^G \dashv \text{Res}_H^G$ を得る. ■

制限関手と誘導関手は, Mackey 関手の圏の間の制限関手 Res_H^G と誘導関手 Ind_H^G を導く. このとき, 実は $\text{Ind}_H^G \dashv \text{Res}_H^G \dashv \text{Ind}_H^G$ が成り立っている (Thévenaz, Webb [3, 命題 4.2]). 左随伴関手は余極限を保ち, 右随伴関手は極限を保つから, Mackey 関手の間の引き戻しや直和は, 制限や誘導によって本質的には変化しないことが分かる.

参考文献

- [1] Serge Bouc. Burnside rings. In Michiel Hazewinkel, editor, *Handbook of Algebra*, Vol. 2, pp. 739–804. North Holland, 2000.
- [2] Saunders Mac Lane. *Categories for the Working Mathematicians*. No. 5 in Graduate Texts in Mathematics. Springer, second edition, 1998.
- [3] Jacques Thévenaz and Peter J. Webb. Simple mackey functors. *Rend. Circ. Mat. Palermo (2) Suppl.*, No. 23, pp. 299–319, 1990.

[4] 中岡宏之. 『圏論の技法』 . 日本評論社, 2016.